

2015 年秋学期レポート
日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 9 期生 瀧澤 泉

2015 年 9 月 1 日(火)、今年度の秋学期はギャロデット大学大学院特別聴講生として継続。国際開発学部への入学を希望し、Introduction to International Development (国際開発の入門)、Ethic in Management (経営倫理)、Economics (経済学)の三つクラスを取得した。大学院のほとんどのクラスは議論タイプであり、週に一回のクラスに参加する時は、週ごとに出される中心課題によるリサーチや先駆者や現在も活動されている方の資料や文献などの分析を済ませた上で参加する必要がある。経済学は大学のクラスであり、国際開発学を学習する際に必修科目のため取得した。

【秋学期(履修クラス)】

Introduction to International Development (国際開発の入門) 教授：Sarah Hogue

国際開発学の必修科目の一つであり、毎週月曜のみ 2 時間 50 分のクラスに参加する前に多様なテーマをリサーチしなければならなかった。歴史から経済、政府、各国の環境や問題など幅広い分野を教わった。昔から起きている問題や当時の社会的影響による、人類や社会の変化に関する基本的な知識を最初に学び、その上で問題解決に取り組んだ先駆者や現在も活動されている方について、資料や文献などで分析を行った。

- 「The Challenge for Africa」
著者：Wangari Maathai (ワンガリ・マータイ)
- 「The End of Poverty」
著者：Jeffrey Sachs (ジェフリー・サックス)
- 「The Bottom Billion」
著者：Paul Collier (ポール・コリアー)
- 「Ending Global Poverty」
著者：Stephen C. Smith (スティーブン C.スミス)

その結果、先駆者の行動や価値観などによって、気づかされることが多い。現在の私たちの生活基盤は、行政をはじめ、法律や教育システムが整備されていることによってある程度、生活水準が保たれている。しかし、各地では、家庭や文化による影響、そして技術の蓄積が少ないことによる貧富の格差があり、経済的なシステムによる問題もいくつか発生している。少しでも変えるためには私たち一般市民の力で何ができるかを考え、行動に移していく必要があると実感した。そんな中に、貧困であるために、学校にも行けず、家事や仕事の手伝いをするろう者がいるかもしれないということを想像した。

Economics (経済学) 教授：Jill Bradbury, Ph.D.

毎週月曜、水曜、金曜の午前中に 50 分間の授業を受け、毎回、出された課題を提出した。Economics (経済) というテキストは 1200 ページほどの分厚い本であり、ミクロ経済学からマクロ経済学まで細かく載せている。経済学クラスはテキストの 2 章～5 章、21 章～30 章のみ学習し、四つの試験、最終レポート・プレゼンを全て成功に終えた。クラスを受けた中、教授から経済と言っても「誰もが持っているお札や金銭だけで生活できる訳ではない」と教わった。例えば、家賃や機械を買うのにローンを使ったり、クレジットカードを使ったりする。つまり、銀行が生活中心にあり不可欠な存在である。それだけではなく、生産・社会活動に関わり、善良な生活を保つためには物とサービスが必要だ。「物価が下がったり上がったりする原因は何か」、「銀行は何の為にあるのか」、「お金とは何か」など中心に四ヶ月間で濃厚な授業を受けることができた。

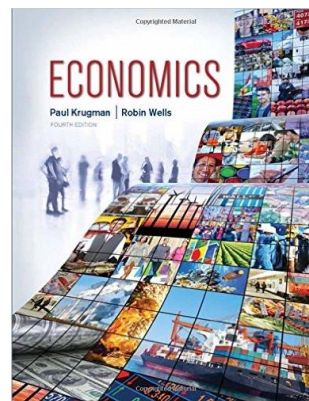


図 1

経済学の父と呼ばれるアダム・スミス氏は 1776 年に経済学の成り立ちについての本を出版し、そこでミクロ経済を發表した。消費と品質のバランスをよく、無駄な労力やコストを減らすために優先度や規則、数から影響する背景を分析するなど学習した。例を分かりやすく挙げると、季節で変わる販売物の変化により、値段と材料のバランスや売れ筋など年中にリサーチする。年中に消費者たちが使った金額を集計し、マクロ経済では国民所得、失業率、インフレ、投資、貿易収入による集計量、ミクロ経済では市場、ビジネス、家庭経済などと生産量の効率の良い基準を定める。価値を上げると生産量が減少し、価値を

下げると生産量が増加するといった定義が今に至る。課題は老年人口の増加による物買いの減少、政府のコントロール限界など様々な面が経済成長に影響を及ぼす。

国際開発の入門クラスから学んだ内容によると、経済成長が追いついていけない途上国、貿易活動の場合は国と国の商品や食品の消費と品質のバランスがかみ合わずにやり取りの限度が先進国よりも限られてしまうことがある。農場の拡大、仕事と子育ての両立ができない、教育の基準が上がらず、資源の不足などから経済成長が改善できない状況になっている。そのように、失業率が高ければ高いほど、ビジネスや貿易が悪化しているということがわかる。産業革命以来、人間心理の関係性や多様な技術、ニーズがますます複雑になってきている。

経済を知れば知るほど、ライフスタイルやビジネス、人口変化など様々な影響で変わっていくのだと想像できた。途上国の罠(Trap)の原因が経済の影響だけとは限らずに国の文化、環境、人権、戦争など様々な原因による影響もかかっている。

Ethic in Management (経営論理学)

このクラスは四冊の本を読み、多様な価値観や意見をディスカッションするのが中心である。毎週火曜の午後5時～7時50分のクラスであり、授業以外にBlackboard(学生・教師たちが課題の提出、資料やレポートをダウンロード出来るオンラインである)にディスカッションボードで意見を書き込んだり、現在に起きている問題の三つをレポートに提出するなどした。

【経営論理学クラスで読んだ四冊の内容】

1. 「Justice - 正義 -」著者：Michael J. Sandel

「正義」とは何か考えるとき人間関係や社会において正しさという価値観を探って互いに認め合うことだが、皆それぞれの違った価値観があり、解決できるまで時間がかかる。宗教と法律との関係があり、人々とディスカッションし、時間をかけて意見を言い合うことで解決の道へ導いていくものだとは私は感じた。

2. 「Lying - 嘘 -」著者：Sissela Bok

人間皆は少しでも「嘘」をつく経験があるかもしれない。ただ、「嘘は自

覚がない」という話があった。嘘をつく必要もないのに、わざわざついでしてしまう。それは自分を守るためなのか？嘘をつくことは良い時もあれば悪い時もあるが、法律に関わる嘘は困難な状況になってしまうため、職場や公の場で正しい判断を分析して判断する必要がある。

3. 「Dobel Public Integrity」 著者：J. Patrick Dobel

ミシガン州ディアボーン大学の教授であった Dobel 氏は道徳、妥協と政治に関わる倫理問題について研究している。主導者、団体、個別などそれぞれにある「責任」についてクラスメイトとグループに別れてプレゼンした。トラブルが起きたときに、前もって制約した規則に従うだけでなく、責任はどこにあるのかなども考える必要がある。注意しないといけないことは、お金に惹かれた結果で悪い方向になってしまう場合があるので複雑な状況をどう判断するかどうかである。

4. 「The Sunflower」 著者：Simon Wiesenthal

この本はホロコースト(ユダヤ人虐殺)の中で収容所から生き延びたユダヤ四人であった経験話である。ユダヤ人の墓にひまわりがなく、ドイツにある兵士たちの墓にひまわりが植えてあるそう。「ひまわりは神の目であり、その目はユダヤ人を虐殺した兵士を見ている」。本人は奴隷経験と家族関係の立場に苦しんだそうだ。自由を奪われ、忘れられない記憶をパソコンのように簡単に削除することができない位の苦しさが伝わってくる内容である。人間は時間がたつにつれて、ユダヤ人を忘れてしまう。歴史に残っていたとしても、誰もが本人の辛さを知らずに時間を過ぎてしまうのが現状である。責任をだれ一人全部背負うことができないという上に、罪悪感から抜けないままに亡くなる方もいるかもしれないということを記憶にとどめておかなければならない。

四冊の本を読み、世界に起きている現状にどう応えるかを考えさせられる内容だった。少しずつ視野を広げて、知識を増やして人と問題に面した時にどう行動するべきかと考えることが私の課題だと思った。

【まとめ】

今回の秋学期を受けて、帰国後の将来に活かせるよう、絵本に関する背景と問題を分析し、重要な知識や経験を習得したいと感じた。春学期からはギャロデット大学大学院国際開発学を進学し、卒業することを目標に日々勉強に努めていきたい。